

日韓聖公会宣教協働20周年大会に参加して

井田 泉

10月18日（月）から21日（木）にかけて福岡で開かれた20周年大会に通訳として参加しました。大韓聖公会から50名近くの参加があり、100名を超える大きな集まりとなりました。

学んだこと、うれしかったこと、悲しかったこと、腹が立ったことなど、たくさんありますが、一言だけ結論を言うとすれば「日韓宣教協働は日本聖公会の存続・発展のために必要である」ということです。

大韓聖公会から学ぶ第一のことは、信仰と宣教の熱心さです。自分たちはイエス・キリストを信じて生き、教会は神の国をこの世界に広めるために存在するという意識が非常にはっきりしています。前向きの積極的な信仰の姿勢はさすがしいものがあります。ある司祭は「宣教に役立たないなら教会は滅ばばいいのだ」と言いました。この表現に直ちに同意するにはためらいがありますが、教会の意味と使命を本気でここに置いて生きていることに心を動かされました。

第二は、教会形成と伝道に向けての温かい気持ちと具体的な方法の細やかさです。教会が新しい人々を歓迎します。大事な機会は区域の礼拝です。親しい祈りの交わりをとおして人々が教会に来るようになる。区域のリーダーは信徒が務め、リーダーの育成は司祭が中心になって行うそうです。礼拝と集会への出席・奉仕・献金など、「ささげること」を通していかに神から恵みをいただいていたかを信徒が証しします。分科会でこのことを具

体例をあげて話してください。女性信徒の柔らかな、真実のこもった言葉と表情が印象に残りました。

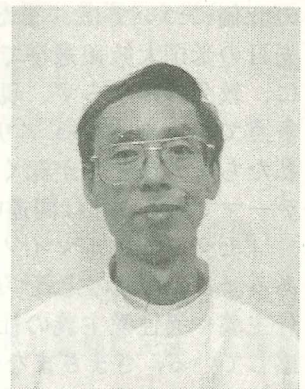
第三は社会的な使命感です。かつての韓国の軍部独裁政治を打破し、民主化を実現する過程に教会が信仰をもって参加してきた、という誇りが感じられました。

大会が終わっての帰り道、韓国人のある聖職から『麦の種の信仰者 朴鍾基』という本をもらいました。1986年7月、韓国民主化運動の高まりとそれに対する政府の弾圧の中、ソウル大聖堂主任司祭であった朴鍾基（パク・チョンギ）神父は、乱入した戦闘警察（機動隊）によって負傷させられ、それがきっかけになって大韓聖公会聖職のほとんどがソウル大聖堂にこもって1週間、民主化を求める断食祈禱をしたことがありました。年譜を見ると朴神父は、韓国NCC人権委員会を代表して「国防部長官を訪問・抗議」、「警察署長を告発」などとあります。

1985年、第2回日韓宣教セミナーの準備会で韓国を訪問したとき、私はソウル大聖堂で同神父の説教を聴きました。主イエスの変容貌の箇所でした。「祈っているうちにイエスの姿が変わった。私たちが祈るうちに信仰が変えられ、生き方が変えられる」。非常に分かりやすく、しかし力を持った言葉でした。1992年秋、朴鍾基神父は57歳で逝去されました。

今回の大会でいろんな人たちと話し、大韓聖公会も困難な問題を抱えていることを感じました。ここに記したことはあまりに一面的であるかもしれません。それでもなお、日本聖公会がイエス・キリストの教会として生きるために、大韓聖公会との、また在日の人々との関わりが必要であると痛切に感じたことは変わりありません。

（いだ・いずみ 京都復活教会牧師）



もくじ

1. 日韓聖公会宣教協働20周年大会に参加して
2. 時のしるし 祝福される多様性という賜物
3. 多民族・多文化共生のすすめ②
在日外国人の人権法制を整備し、真の共生社会を！
4. 街かどデイハウス『さらんばん』
5. ウルリムの編集委員になって
6. こんな本あります 本から「在日コリアン」を考える⑨
7. 詩 「前提」
8. アートとカづけられること／余韻

去る10月18日、カンタベリー大主教招集の特別委員会から、『ウィンザー・レポート2004』という文書が公表された。昨年11月、米国聖公会で、同性愛者であることをカミングアウトされているジーン・ロビンソン師が主教に按手されたことと、カナダ聖公会のある教区で、同性婚（ユニオン）の祝福を公式に可能とする決定をしたことにより、世界聖公会は分裂の危機に直面している。この深刻な事態を受けて設けられたのが、この特別委員会である。今回のレポートの評価については、また別の機会に委ねるが、先日の米国大統領選挙でも明らかになったように、教会のみならず、現在の世界的な社会的論争点であるセクシュアリティをめぐる問題は、私たち一人ひとりが深く考えなければならないテーマであることは間違いない。

「セクシュアルマイノリティ」という言葉がある。この言葉の定義づけは難しいが、「男女二分主義や異性愛主義の社会の中で、生き難さを感じている、さまざまなセクシュアリティ（性）を持った人々」となろうか。いずれにしても、この世の中には、明確に異性愛の「男性」「女性」の区別しかありえないというのは幻想であることだけは間違いない。社会の無理解の中で、自らがそのようなセクシュアルマイノリティであることを公にする、あるいは「できる」方は多くない。しかし、最も少なくとも人口の約3%、多い場合には、約10%という研究もある。日本のキリスト者人口が1%に満たない現実からすると、街を歩けば、キリスト者に会う確率よりも、セクシュアルマイノリティの方と出会う確率の方が遥かに高いことになる。

さらに正確に言えば、実は私たちの一人ひとりが異なるセクシュアリティを持っているのである。セクシュアリティとは、男性と女性の2種類だけではなく、100人いれば100通りの性が存在する。すなわち、自分と同じ性の人には存在しない。セクシュアリティは多様であり、私たちはその「グラデーション」の中に生きているのである。したがって、すべての人が、自らのセクシュアリティというものが、多様な性の中の一つにすぎないことを確かめることができた時、その時にはもはや「セクシュアルマイノリティ」という言葉は意味を持たなくなるであろう。

しかしながら、現実には、未だ私たちの社会はセクシュアルマイノリティの人々の痛みや苦

祝福される多様性という賜物

西原廉太

しみに対して無理解である。そのような社会にあって、自らの存在（アイデンティティ）を取って否定したり覆い隠さざるを得ない人々がいることに、私たちは気づきたい。「自分らしく生きること」。それは一人残らず誰もが与えられるべき当然の権利である。自分が自分であるために、「カミングアウト」という道を選ぶ方もおられる。自らがセクシュアルマイノリティであることをカミングアウトされた日本基督教団の平良愛香牧師はこう語られる。「カミングアウトとは、ただ単に自分の『隠し事』をオープンにすることではない。本当の自分と向き合ってもらうために、時には大きな犠牲を覚悟で行う『新たな関係性構築の行為』なのである」。

「教会」は一方で、セクシュアルマイノリティの人々が最も生き難い世界の一つであると言われる。『同性愛行為』などを聖書が厳しく禁じており、罪としていると言われることや、セクシュアリティについて語ることへのタブー感などから、一般社会以上に差別的な状況があるのも事実である。今般の世界聖公会の状況もその反映である。しかし、そのような否定的反応は、明らかに聖書を逐語霊感的に、もしくは原理主義的に読んでいることと、セクシュアルマイノリティへのまったくの無理解によるものだと言える。

神は創造の内に人間に多様性を与えられ、またそれを祝福された。この理解ほど、私たちの教会にとって重要なものはない。モーセに対して神はご自分の名前を「私はある」と答えられた。それは、すべての人が、神の名を讃美すること、すなわち「私はある」「私は私なのだ」「私はここにいる」と叫ぶことを求められたからに他ならない。人間をとる漁師の持つ網とは、すべての人間の多様性を包み込むものであり、その網からは、ただの一人もこぼれ落ちる者はいない。イエスにとっての癒しや奇跡とは、「あなたはあなたのままで良いのだ」と祝福され、破れた存在や尊厳を回復される行為である。これは実にシンプルだが、最も大切な福音の真理である。「あなたは間違った存在などではない」。「あなたは決して独りではない」。このような福音の励ましを語るこそこそが、教会の努めである。それは、セクシュアルマイノリティの方々だけに対してではなく、すべてのこの世にある人々に対して必要な励ましなのである。

(にしはら・れんた 立教大学教員)

在日外国人の人権法制を整備し、真の共生社会を！

金光敏

文部科学省が外国人児童生徒の不就学実態の調査に乗り出すという。すでに外国人の人権擁護に取り組むNGOでは、この不就学問題に関わり政府に対応の遅れを指摘していた。日本で暮らす外国人はすでに200万人に及ぼうとし、短期、超過滞在者も含めばその数は大きく膨らむ。また、外務省の海外交流審議会は、単純労働者の一部開放を提言、政策的側面においても外国人は増加することが見通される。

こうした中、10月7日・8日にわたり日弁連人権擁護大会が宮崎で開催され、「外国人人権の基本法制定を求める宣言」を含む5つの宣言が採択された。同時に分科会で外国人の人権基本法要綱草案も発表され、差別禁止とマイノリティの人権保障を提言した。

在日外国人に関わる法律は、後にも先にも外国人管理を目的とする「出入国管理及び難民認定法」と「外国人登録法」だけであり、この法律以外の事柄はすべて諸官庁の裁量に委ねられ、在日外国人の人権は、「煮て食おうが焼いて食おうが自由」なのである。

こうした法体系の未整備は、在日する外国人が増加しないと前提に立ったものであり、在日外国人が旧植民地出身者の在日韓国・朝鮮人や在日台湾人が主であった頃のその体系が現在まで続いている。政府は旧植民地出身者への戦後補償を拒み、民族性の継承を阻害することで、国内に少数民族問題を生じさせない政策を取ってきた。その結果、民族教育は認められず、社会保障の未整備や差別は放置され、一部是正が進む80年代まで、本当に深刻な「合法的抑圧」が加えられてきた。

そうした旧植民地出身者政策が、現在の在日外国人政策の基底になっていることを見逃すことはできない。

ここ近年の国際化に伴う急激な外国人の増加で、外国人の集住地区は多数の府県にまたがり、それらの自治体が「外国人集住都市会議」を発足させ、政府の外国人政策の未整備を指摘し、在日外国人に関わる法的な整備と共生社会に向けた取り組みを求めている。

在日外国人はすでに住民として地域に定着し、経済や文化の多様性において重要な役割を果たしている。しかしその一方で、深刻な民族・人種差別が横行し、それが要因となった事件や事故が多発している。2、3割が未就学であると言われる外国人の子どもたちの教育問題は、人権法制の遅れが引き起こした典型例である。彼らの教育権を保障すべき自治体や学校が対応に困り、子どもを学校内外にただ放置していることを示している。

こうした要請は国内だけの声ではない。在日外国人人権法制の整備は、国連の条約履行監視機関が、日本政府に対し再三に勧告している。今回の日弁連人権擁護大会で採択された「宣言」は、国内外の動きをつなげたもので、それだけ国内の外国人の人権状況が切実であることを示す。外国人の人権法制の整備は、これ以上放置できない問題だ。すぐにでも地域や自治体が共生社会づくりに取り組む必要と、それらの取り組みを網羅する政府レベルの外国人人権法制が、急がれるべきである。

(きむ・くあんみん)

街かどデイハウス『さらんばん』

鄭 貴 美

一世が生きた時間は、祖国と在日と日本の歴史がそのまま重なると言えます。

朝鮮人で、女であるハルモニたちにその歴史は、そっくりそのまま生身の身体にのしかかったに違いないことでしょう。身震いがするほどの歴史を背負ってきたハルモニたちの、その凄まじい「生」を共有することなど到底できるはずがないと感じながらも、在日として生きようとすればするほど、二世三世に課せられた責任が重くのしかかって来るような思いでいっぱいです。ハルモニたちに残された貴重な時間を誰が知るのか、いや、何事も無かったようにこの日本社会で「生」を終えるのだろうか!? 何の武器も持たず、素手で生きながらえて来た愛してやまないハルモニたちは、どのように「生」き、どのように「死」んでいくのだろう。

2000年『介護保険』でにわか騒がしくなった日本社会を横目に、そんなことを繰り返し考えました。年金もない、言葉も食べ物も思考も全く違うハルモニたちが、安心して「生」を届けることができる場所が要るのではないだろうか、年金がなくても、言葉を食べ物も思考を受け入れる場所が要るのではないだろうか、と思い巡らせる毎日でした。

私は夜間中学で学ぶハルモニたちに出会い、80歳を過ぎて今なお『学生』であり続ける姿から『生きる力』見たのでした。壮絶な生きざまを覚えてたての文字で綴り、「今が青春や!」と笑い飛ばすのを目の当たりにし、ハルモニたちが答えを導いてくれたのです。残された貴重な時間をどのように過ごし、何をしてもらわなければならないのか答えを頂きました。

自らの「生」を自らの言葉で笑い、泣き、憤りながら語り継ぐ「語り部の場」を創造することでした。腰をど〜んと据えて座り、言葉も食べ物も考え方

も「朝鮮人のまんま」生きることのできる場所を作らなければならないことを知ったのです。

ウリソダン運営委員会（日本人の牧師・夜間中学教師、在日三世の報告者で構成されている）は何度も協議を重ね、その結果 街かどデイハウス「さらんばん」を立ち上げることにしました。高齢になられたハルモニたちの活きた時間を保証するために、夜の活動（夜間中学、ウリソダン）から昼の活動（デイハウス）に繋げようと考えたのです。足腰が痛くてウリソダンはしんどいというハルモニたちも、80歳過ぎてもウチは現役や、というハルモニたちも、限りなく生き続けられる場所が必要なのです。現役や、と元気なハルモニはさらんばんから、ウリソダンへ出勤(?) されます。時には夕飯を食べていかれることもあります。

私たちは「さらんばん」でハルモニたちを大事に守ろうという考えではなく、まだ学び続けていただくための欲深い活動を展開しようと思っています。誇り高い私たち民族の財産だからこそ、最後の瞬間までともに学びつづけようと思います。

「統一問題」「拉致問題」等で意見が食い違いもめることも多いです。でも、自分の考えを遠慮なく吐き出せる場所にしなければと思っています。小・中・高校生たちがフィールドワークに来る機会も年々増えてきています。学生たちにしっかり朝鮮人の意見を話して頂くよう、私たちスタッフもハルモニたちの聞き取りをすることもあります。ハルモニたちには戦争と差別と民族と、まだまだ次代に語り継がなければならない責任があるはずだと私たちは認識しています。

もう一つ大きな特徴は、ハルモニたち全員をフルネームで本名を呼ぶことです。スタッフももちろん! 「姉ちゃん、お茶ちょうだい」や「山本姉さん」「金本姉さん」は禁忌です。私たちはお互いに精一杯尊重しあいたいと思うからこそ、名前にもこ

だわり続けたいと思っています。特にハルモニたちには、子どもの頃オモニに呼ばれた名前で過ごして頂きたいという思いがあるからです。みんな「エーと、エーと」と言いながら競い合って名前を覚えあっています。

最後まで自分らしく、「朝鮮人のまんま」

来年90歳を迎えられるハルモニが二人、それから毎年90歳を迎えられるハルモニがおられます。さらんばんは、今年10月7日に満3年を迎え、4年目に入ります。

「さらんばん（お客様の部屋）」と名付けたのは、この日本社会で朝鮮人として大切にされたことはおそらく無いだろうハルモニたちに、さらんばんではいつもお客様のように大切に思っていますよ、という気持ちを伝えたいからでした。

世代の違いから大小のトラブルが生じたことも

ありましたが、ハルモニたちはやっぱり大人やな〜と、感心させられる場面がたくさんありました。感謝の気持ちでいっぱいです。どんなに頑張っても何をしても最後の日を覚悟しないといけないと言いつつ聞かせながらの毎日です。

ハルモニたちに言っています。

「しんどかってもできるだけ毎日来てね。いつ何があるかわからないから、家で一人にならないように。一人こっそり死んだりしないで。みんなの前で、この日本でどんな最後を迎えるのか見せないといけない。それがハルモニの最後の最後の仕事ですよ」

朝鮮人一世のハルモニたちがどう「生」きて、どう「死」んでいくのか、それはまさに、私たち二・三世がどう「生」き、「死」んでいくかということに繋がると考えるからです。

(ちよん・ぎみ 街角デイハウスさらんばん)

ウルリムの編集委員になって

伊 藤 美 佐 子

はじめまして、京都聖ステパノ教会の伊藤美佐子です。今回からウルリムの編集に参加することになりました。よろしくお願ひします。

2004年7月、生野センターに在日韓国・朝鮮人高齢者のあそび場「のりばん」が誕生しました。私は「のりばん」の調理ボランティアをしています。毎回（水曜日・金曜日）、韓国料理を作り、スタッフ・利用者さんと共に食卓を囲み、楽しい交わりの時を持っています。食事をしながらいろいろと話が弾みます。どのように話が展開していくか、毎日が楽しみです。ジーと胸が熱くなったり、大きな声で笑ったり、利用者の方々がお元気で話が上手で、チェジュのことを話されると、思わず「一緒に連れて行って」と言いたくなります。野菜たっぷりの韓国料理と人との交わりを楽

しませて頂いています。どこから来られていますかと聞かれ、京都の桂ですというと、「遠いねえ」と皆さんがおっしゃいます。でも遠く感じないし、人との出会い・交わりが大きな喜びです。

京都教区宣教局社会部では、毎年、生野体験学習会を行っています。はじめて学習会に参加した時、なにかしら懐かしく、親しみを覚えた生野の町でした。私は、今、京都の桂に住んでいますが、両親は大阪出身、私も大阪の東淀川区で育ったからかもしれません。大阪の町が大好きです。

これからも「のりばん」に関わる方々、利用者される方々と出会い交わり、そして共に歩んでいきたいと思っています。

(いとう・みさこ 京都聖ステパノ教会信徒)

本から「在日コリアン」を考える ⑬

高二三



闊歩する在日

丁章詩集
定価2000円+税
新幹社

丁章（チョン・チャン）さんの第3詩集『闊歩する在日』を出版した。第1詩集、第2詩集もそれなりに味わいの

ある詩集であったが『闊歩する在日』は更に進化した詩集として文学的に高い評価を得て読まれていくことだろう。

丁章さんの詩のキ・ワードは「サラム」という言葉である。以前の詩集でも「サラム」という概念規定を説明していたのだが、読者になかなか伝わりきらないというところがあったように思う。「サラム」という理想を実践している存在こそが「サラム」なのである。『闊歩する在日』では「サラム」という概念が明確になったということとあいまって「サラム」をとりまく様々な諸問題が浮き彫りになっている。日本人との恋愛・結婚・子育て、言語、日の丸・君が代、食べ物、国籍、世代……、これらの諸問題は政治から文化に至るまであらゆる分野に及んでいる。その決意の現れが『闊歩する在日』なのであろう。

丁章さんは実に優しい人である。その優しさが詩の言葉にも現れている。一度読んだときは、平易で平凡に思われていた詩の言葉も何度も読んでみると味わい深いものであることに気づく。たとえば『闊歩する在日』の冒頭の詩「日本人と恋をして」を見てみよう。「日本人と恋をして／どれだけ自分が日本人でなく／そして朝鮮人ではないかを／はじめて知らされたザイニチ」「日本人と恋をして／自分の朝鮮と他者の日本を／愛せるようになったザイニチが／新たにサラムを自称した」

何も説明を必要としない詩である。だが、何度

も噛みしめて読むと、詩人・丁章のおかれている状況、これから生きていこうとする決意が読み込めるのである。

言葉に対しても詩人の考えが集約されている。「在日サラムの言葉 それは／決して帰りのない 日本語と／どこまでも到達しえない ウリマルで／つむぎだされる／新しい言葉」（「在日サラムマル」より）

このように愛を詩い、言葉・故郷・国語を詩い、在日の世代・文化・歴史を詩いながら、在日サラム（真の在日朝鮮人）として生きていくということはどういうことかと問うているのである。問うてばかりいるのではない。自分なりの道すじを毅然と示し、これからの自分のありようを表明しているのである。

数年前、若い丁章さんにお会いした時、静かで老成した詩人だなあとと思った。話し出すと淀みなく、詩について、文学について、在日について語り出した。決して激昂はしないのだが熱のこもった語り口に文学に対する信念を感じた。そして書物やら人々の体験やら意見やらを吸収する能力の高さに若さを感じた。

この丁章さんの第3詩集『闊歩する在日』を出版して、改めて、初めて出会った時のことを思い出している。あのときに熱く語っていたことが、あの時に温かく私を迎えてくれたご家族の方々があってこそこの詩集は活きているのだなあ、と。

在日朝鮮人のめぐる市民集会は多々ある。私はそれらの市民集会の場で丁章さんの詩が朗読されたいなと思っている。丁章さんの詩はそれだけの問題意識がこもっている詩、人々に口ずさまれてこそ、詩が生きていくような気がしてならないのだ。（こ・いーさむ 新幹社代表）

『闊歩する在日』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357
e-mail: ikuno@nssk.org

前提

丁章

人間としての大前提の無い者から
同じ人間だからと手をさしのべられても
困るんです

人間であろうとすることを獲得した人間でない者が
いくら人間と連呼したところで
そのようなわ面だけの人間と
手を繋げるほど楽天的な人生では
悲しいかな ありませんでした

期待外れは期待を抱くことで起こるので
容易く期待は抱かないことにしています
覚悟の足らない手と結んで
あとから迷惑がられるのも辛いことなんです

完全な人間はどこにもいないけれども
この背景に広がる歴史を望見する気もない者と
どんな握手ができますか
社交辞令の握手ですか それとも強要の握手

人間であろうとする事から自覚を避けているものが
未来を望見してもそこには
血の通った想像ではなく
無感覚な空想が見えるだけなんです

人間であることの前提に人間でありたいという叫びがあり
その意欲の叫びが自らを完全な人間であろうとする方向へ
追いたててゆく

自らが不完全であることの疚しさを
ひきうけられずに
逃れようとする者から
手をさしのべられても
困るんです

詩集『マウムソリ 一心の声』より

『民族と人間とサラム』、『マウムソリ 一心の声』
『闊歩する在日』は、聖公会生野センターで
取り扱っています。

丁章（ちょん・ちゃん）

1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住
著書

詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ 一心の声』（新幹社）

アート と カづけられること

鈴木 恵一

聖公会生野センターの美術教室を応援してください。という、「趣味の教室を応援なんてどうして必要なの」というような表情をされることがよくあります。

美術教室の美術展をして毎年開いて5年目。なんで、こんなに一生懸命になってしまうのか、ほくも先生もボランティアも、そしてなにより 家族や本人も。

「障害のあるなしに関わらず・・・」言葉でいってしまえばとても正しいそのことも、毎回の授業の中で模索し続け、そのプロセスの一面を伝えるのが美術展のように思います。

そして、その一生懸命さが、これまでの保育室をとびだして、新しいアトリエを手に入れるなに

よりの力になったのだと思います。

この美術教室に関わるまでは、絵よりも音楽のほうが好きと思っていました。しかし、じっと絵を見ていると、その作者のひとりひとりの生活の時間が、画用紙やキャンバスに刻み込まれているのが見えてきます。そう感じるができるようになったのもこの美術教室の力なんだろうとかんじています。いまあらためて思うのは「ひとりひとりの生き様を表現する」その手伝いをするのは、聖公会生野センターが大切にしてきたことそのものと思うのです。

だから、大きな声でお願いします。クリンもだん美術教室を応援してください。

(すずきけいいち 聖公会生野センター主事)

余韻

先日、新聞で2つの記事を目にした。一つは、「日韓で歴史副教材をつくる」というもの。前者は日韓の教師たちの共同作業である。韓国側は被侵略と独立に重視を置き、日本側は江戸時代の朝鮮通信使などの友好の歴史を中心にした、というものである。作成の過程でさまざまな論議はあったようだが「共同作業」で教材が作られることに期待を持ちたい。「在日の歴史教科書」は韓国民団が在日の研究者と共に作るものである。これまで「教科書的なもの」はあったが、教科書ははじめてである。私たちに及ぼす影響が大きいことを願いたい。聖公会生野センターでは7月より在日高齢者のたまり場「のりばん」をはじめた。週二回(水・金)、昼食を共にしながらおしゃべりを楽しんでいる。ハルモニ(おばあさん)たちの語る言

葉の端々に私たちへの「生きた歴史のメッセージ」がある。時には笑いながら、時には少々声を荒くして・・・。私たちがその声、その姿に向き合うことは歴史の学びそのものである。一度、おいしいのりばんの昼食をとりながらハルモニたちの声に耳を傾けてみませんか?(ピクアンチャ)

今夏、10個もの台風が日本本土を直撃した。日本を狙いすましたような針路の「制度」は、なにかの意思とも思えるほどの高いもの。「どこかにそれで行って」と祈る自分に激しい自戒の思いがした。「それでは中国か朝鮮半島にそれで行くのを望むのか」と。「自己中」と偽善の衣をまとう自分に罪の深さを感じた、正直なところ。(大)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 U F J 銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：齊 藤 壹

編集人：大 橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。